

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 22 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730475

研究課題名(和文)トランスナショナルに構築される「日比国際児」のアイデンティティとキャリア・プラン

研究課題名(英文)Transnationally constructed identities and career plan of Japanese Filipino Children (JFC)

研究代表者

小ヶ谷 千穂 (OGAYA, CHIHO)

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：00401688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：日比間の女性の国際移動の一つの帰結として生まれてきた日比国際児は、国家と市場、そして市民社会の論理の中で新たな国際移動のアクターとして登場してきている。本研究によって、その成育歴の中で支援団体にかかわってきた子ども・若者たちが、自らトランスナショナルな移動を経験することで、母親とは異なる多様な「日本」経験を蓄積し、そこから自らのキャリア・プランを設定していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Japanese Filipino Children (JFC), is one of the consequences of migration of Filipino women to Japan. Recently, they are becoming transnational actors within the complex context created by states, markets as well as civil society. This study revealed that JFC, who have been involved in the civil society activities during their growing path, have accumulated their own experience of transnational mobility between Japan and the Philippines and they have set up their career plan based on their own experience with Japanese society, which is often more diverse than their mothers'.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：日比国際児 移動経験 フィリピン 国際社会学 アイデンティティ 国際移動と子ども

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代半ば以降、在留資格「興行」でエンターティナーとして日本で就労するフィリピン人女性が増加するのに伴って、主に日本人を父、フィリピン人を母とする「日比国際児 (Japanese Filipino Children :JFC)」がいわゆる「社会問題」としてフィリピン、日本の双方で取り上げられるようになった。「日比国際児」問題はこれまで、1) 日本国籍取得をめぐる国際婚外子の権利問題、及び2) 日本人父親からの養育放棄の問題、として、「子どもの権利」の枠組みから議論されてきた (国際子ども権利センター編『日比国際児の人権と日本』明石書店、1998年)。さらに、2009年の国籍法の改正により、婚外子である国際児の場合も日本人父の出生後認知によって日本国籍の取得が可能となり、新たに日本国籍を取得して来日を希望する「日比国際児」も増加し始めている。

しかし、日比双方の支援団体を中心にした問題提起・報告型の研究が積み重ねられてきた一方で、「日比国際児」が分析的概念として社会的に検討されることはほとんどなかった。さらに、国籍法改正に代表されるような制度の変化や、「日比国際児」と呼ばれる若者たちの成長、といった国際社会的にも重要な環境変化が続々と出現してきているにも関わらず、「日比国際児」に関する学術研究は、その現実を十分に分析しきれていない。

こうした問題意識を踏まえて申請者は、2008年度～2010年度までの研究「日比国際児のアイデンティティ構築に関する日比比較研究～支援組織の役割に着目して」(科学研究費補助金若手研究B)において、日比双方に在住する「日比国際児 (Japanese Filipino Children:JFC)」と呼ばれる子ども/若者が、自らのアイデンティティをどのように構築しているのかを、主として支援組織の役割に着目しつつ、研究を行った。その結果、主に以下のような知見を得るにいった。

フィリピン在住の子どもたちの「日比国際児」としての自己認識は、支援組織のさまざまな活動に参加することによって時間の経過とともに、トランスナショナルな活動を通して立ち上がってきている。さらに最近の特徴として、フィリピン在住の日比国際児の間での「自助意識」の生成が顕著である。これはすなわち、「日比国際児」としての自己認識が、個人の水準から集合的なレベルにまで展開されはじめていることを示している。つまり、日比間の女性の国際移動を具体的な契機として生まれてきた「日比国際児」は、その存在が日比間の人の国際移動の一つの帰結であると同時に、トランスナショナルな社会運動の中で生育し、アイデンティティを構築してきた子どもたちでもあることが、上記研究より明らかになった。

しかしながら、上記研究期間中に出現した

新しい局面として、とりわけ2009年の日本の国籍法改正後、既存の日比支援団体と日比双方の政府や国際機関との意見交換、また「日比国際児」を新たな労働力供給減として確保しようとする日比双方の民間企業・斡旋業者のトランスナショナルなネットワークの活動がそれぞれ活発化してきた。こうしたネットワークを通じてフィリピン在住の「日比国際児」と呼ばれる若者たちがキャリア・プランを立て、中には日本への国際移動を意思決定する場合も増えてきた。そこで本研究では、従前の研究成果を有機的に展開し、在比「日比国際児」のアイデンティティ構築過程の中でも、特に10代後半～20代前半の「キャリア・プランの設定」という場面に着目し、そこにおける国家・市場・市民社会、という3つのアクターと当事者との相互作用から、あらためて「日比国際児」の動的なアイデンティティ構築を国際社会的視角により、さらに実証的に解明していくことを課題とした。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下の3つの問いに答えることを具体的な目標とした。

フィリピン在住の「日比国際児」と呼ばれる10代後半～20代前半の若者自身がキャリア・プランを決定する際に国家(日比双方)・市場(斡旋業者・民間企業)・市民社会(支援団体)がそれぞれどのように影響を及ぼしているのか。のキャリア・プラン決定過程において、「日比国際児」というアイデンティティがどのように構築されているのか。

上記の3アクター(国家・市場・市民社会)は、特に「日比国際児」のキャリア・プランに関してどのような見解を持ち、そこにどのようなアクター間のダイナミズムが生じているのか。

ここで当初準備した仮説は以下のようであった。

「日比国際児」のキャリア・プラン設定局面において、特にこれまでの支援団体(市民社会)とのかかわりの度合いが、日本への国際移動を行うか否かを決定する際の大きな分岐点になっているのではないかと。これまで支援団体とのかかわりが少なかった子ども/若者の場合は、市場(民間業者)の影響力が大きく、それによって日本への国際移動が誘発され、市場の論理に適合した形で「日比国際児」アイデンティティが構築される。他方、支援団体にかかわってきた子ども/若者の場合は、市民社会的発想に基づく「日比国際児」アイデンティティが構築され、結果として「日比国際児」とカテゴライズされる子ども/若者間に分断が生じるのではないかと。

しかし、3. 研究の方法、で述べるように研究の実施に当たっていくつかの変更が生じたため、上記の研究目的のうち、より、

に力点を置いて実際の研究を実施した。

### 3. 研究の方法

本研究では当初、現在フィリピン国内に居住している日比国際児と、すでに来日し、日本で就労・就学している日比国際児の双方に対してインタビュー調査を行う予定であった。しかしながら、特に研究1年目に東日本大震災の影響などがあり、後者に関する具体的な聞き取り調査の実施が計画どおりには行かなかった。そのため、当初の予定を若干変更し、以下のように研究を実施した。

(1) フィリピン国内における、「日比国際児」のキャリア・プランの決定とアイデンティティ構築過程との関係についての調査。具体的な調査対象は、支援組織スタッフや母親等を介さず筆者と直接コミュニケーション可能で、かつ自身のキャリア・プランについて考え始めている10代後半～20代前半の子ども/若者で、ケース・スタディの聴取を目的とした非指示面接調査を行った。

(2) 「日比国際児」のキャリア・プランにかかわるアクターとしての「日比国際児」支援団体が主催する来日プログラムへの参加を通じた日比国際児のアイデンティティおよびキャリア・プランの設定に関する調査。

(3) 本研究の対象である在比日比国際児のキャリア・プランやアイデンティティ構築との比較・参考の観点からの、日比国際児およびフィリピンから学齢期に来日した子ども・若者、および東日本大震災で被災した在日フィリピン人女性の学校経験、アイデンティティ構築過程についての経験共有イベントおよび日本での就労準備プログラムの参与観察。

(4) 広く、「国際移動と子ども」という研究分野の理論的課題の検討および国内外の研究者との意見交換。

### 4. 研究成果

本研究を通して、以下のような知見を得、さらには新たな研究課題を設定することができた。

(1) その成育歴の中で支援団体にいかかわってきた子ども・若者たちは、活動を通して多様な「日本」経験をしており、それは必ずしも彼らの出生時における条件(父親が日本人である、母親が日本在留資格「興行」で就労経験がある)に直接かかわってはいない。

(2) こうした多様な「日本」経験に基づきながら、就労先として日本を選択するかど

うかは、母親との関係性の度合いによって規定されることが多い。

(3) すなわち、子どもたちが生まれてきた背景としての「移動」(主として「移動の女性化」によって導かれたフィリピンから日本への女性の移動)だけでなく、彼ら自身が経験する日比間での「移動」そのものが、本人たちのキャリア・プラン設定や、その基盤となるアイデンティティ構築過程において重要である。

人生の半分近くを支援組織の活動の中で過ごしてきた子どもたちは、「父親-日本人、母親-フィリピン人」という“出自”や家族関係を超越して、日比の社会を経験してきている。支援組織に参加するという、当初は母親にもっぱら牽引された行為を契機としながら、その活動の中で「JFC」に「なっていった」彼ら・彼女たちは、日比双方の市民運動文化との接触の中での生育してきた子どもたち・若者たちである。すなわち、日比間の人の移動の一つの帰結として生を受けた「JFC」と呼ばれる子ども・若者たちの一部は、同時に、自らその支援組織での活動において具体的な日比間の移動を経験し、多様な「日本」社会と接触することで、在留資格「興行」に限定されてきた母親たちとは異なる、より多様な「日本」経験をそれぞれ獲得し、こうしたトランスナショナルな社会運動と移動経験の中で生育してきた子どもたちでもあるのだ。また、「日本での就労」を将来希望していることがあたかも前提となっているかのように語られがちな在比の日比国際児の中での「日本」に対する認識は多様であることも明らかになった。フィリピンにおける母親や友人との関係の安定性に加えて、自らの「日本」経験の中で、それぞれの日本社会におけるリアリティをつかみとった若者たちは、日本での就労ではなくフィリピンでキャリアを積むことを選ぶ場合もある。

本研究を通して展開された、「国際移動と子ども」という新たな研究領域は、「親の移動に付随するものとしての子どもの移動」というこれまでの移動研究の視点を超越して、親の国際移動によって生まれてきた、あるいは最初の移動を経験した子ども・若者たちがその後、自らのトランスナショナルな移動経験を重ねる中で、親とは異なる移動経験に基づくアイデンティティを構築していく、という新たな理論的地平を開いている。

本研究で得られた知見をもとに、2014年度からは新たな研究課題「トランスナショナルな移動経験を通じた日比ダブルの若者のアイデンティティ構築」(科学研究費補助金基盤C:課題番号26380672 研究代表者:小ヶ谷千穂)を遂行する予定である。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

- (1) 小ヶ谷千穂「支援組織との関わりから見る「日比国際児/JFC」のアイデンティティと複層的な”日本経験”～「JFC研究」のための試論～」『国際交流学部紀要』15号。2013年。189-213頁。(査読無し)
- (2) 小ヶ谷千穂「書評：シバ・マリヤム・ジョージ著(伊藤るり監訳)『女が先に移り住む時～在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』」『ジェンダー研究』16号。2013年。123-125頁。(依頼原稿)
- (3) 小ヶ谷千穂「書評：上野加代子著『国境を越えるアジアの家事労働者～女性たちの生活戦略』」『ソシオロジ』176号。2013年。157-161頁。(依頼原稿)
- (4) OGAYA, Chiho, 2012. ,“Transnational Citizenship of Japanese-Filipino Children: Dynamics of Identity Constructions and the Role of the Support NGOs”, *Quilted Sightings :A Women and Gender Studies Reader: Special Issue on Migration*, Vol.2 No.1, pp.29-40. (依頼原稿)
- (5) 小ヶ谷千穂「書評：大橋史恵著『現代中国の移住家事労働者：農村 都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリテクス』」『中国女性史研究』21号、2012年。80-86頁。(依頼原稿)

[学会発表](計 4 件)

- (1) OGAYA, Chiho. “Family Reunification for Whom? The Case of Filipino Youth and their Transnational Mothers in Toronto”, *112th Annual Meeting of American Anthropological Association*, Chicago Hilton Hotel, U.S.A. November 20,2013.
- (2) OGAYA, Chiho. “Dislocating dreams of family reunification: case of transmigrant mothers and children in Toronto, Canada” *,International Conference on Children Migrants and 3rd Culture Kids*, Jagiellonian University, Krakow,Poland. June 7, 2013.
- (3) OGAYA, Chiho. “Mother's Dream and Children's Realities: 1.5 Generation and their transmigrant mothers in Toronto,” *3rd International Conference of*

*Geographies of Children, Young People and Families*, National University of Singapore. July 11,2012.

- (4) OGAYA, Chiho. “Transnational citizenship of Japanese Filipino Children: Dynamics of the construction of their identities and the role of the support NGO,” *International Conference on Human Reproduction and Citizenship in Global Era*, Institute for Gender Research, Seoul National University April 22, 2011. 2011.

[図書](計 3 件)

- (1) 小ヶ谷千穂「越境家族」「移動の女性化」吉原和夫ほか編『人の移動事典：日本からアジアへ・アジアから日本へ』所収。丸善出版。2013年。512頁。
- (2) 小ヶ谷千穂「「批判的移民研究に向けてフィリピン女性移民を通して」伊豫谷登土翁編著『移動という経験：日本における「移民」研究の課題』第6章所収。有信堂。2013年。239頁。
- (3) 小ヶ谷千穂「開発」「移民女性労働」木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編『よくわかるジェンダー・スタディーズ』所収。ミネルヴァ書房。2013年。231頁。

6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
小ヶ谷 千穂 (OGAYA CHIHO)  
横浜国立大学・大学院都市イノベーション  
研究院・准教授  
研究者番号：00401688